

# 第7回 社会教育委員会議 議事概要

## 1 議事

### (1) 報告事項

第3次札幌市生涯学習推進構想の実施状況について

### (2) 協議事項

今期の協議テーマ

「地域課題に対応する社会教育～災害に向き合う地域づくりを事例に～」について

## 2 日時

令和2年(2020年)10月30日(金)10時～12時

## 3 場所

S T V北2条ビル6階 教育委員会A・B会議室

## 4 出席者

### (1) 委員(出席8名) 欠席 辻委員、牧内委員

一戸委員、臼井委員、佐久間委員、鈴木委員、土田委員、原田委員、安田委員、山口委員

### (2) 事務局(7名)

小田原生涯学習部長、中目生涯学習推進課長、小柳生涯学習係長、寺崎社会教育担当係長、国奥職員、中原職員、横山職員

## 5 開催形態

公開(マスコミ関係者2名傍聴:北海道新聞社1名、北海道通信社1名)

## 6 会議内容

### (1) 報告事項:第3次札幌市生涯学習推進構想の実施状況について

#### ア 資料説明(報告事項)

事務局から資料1-1「第3次札幌市生涯学習推進構想 令和元年度実施報告」、資料1-2「関連事業実施状況調査票」等を用いて報告を行った。全体を通して、令和元年度の実施報告の内容について、事業一覧で、事業所管課の事業評価が「▲」印だったものが幾つか散見された。その中でも、新型コロナウイルス感染症の影響で施設が休館したとか、事業を中止したというものが見られたところ。令和2年度事業については、まさに今進行中だが、恐らく各事業の所管課

で、令和元年度以上にそういったコロナの感染症拡大の影響を受けているものと推測されるので、次年度においては、この後議論いただく社会教育委員会議の検討内容や札幌市における新型コロナウイルス感染症への対応に係る検証等を踏まえてまいりたいと考えているところ。（小柳生涯学習係長）

## イ 質疑応答

・感想だが、この事業評価で「◎」「○」「▲」とあるが、今回の場合、新型コロナやヒグマの出没もあり、ある面では大きな天災であったり、幅広い感染症であったりというようなことに、具体的に対応した結果が、人数が減っていたり機会がなくなったりするというようなことになった。こういったものが「▲」というのは非常にイメージが、やっていない感じが出てしまうので、「評価不能」とか何か別の軸があったほうがいいのではないかと。単純に記号だけ見てしまうとうまくやれていないみたいな印象になってしまう。（臼井委員）

・令和元年度の事業なので、新型コロナで特に影響を受けている令和2年度については、もっと厳しいような状況になるのは目に見えていると思う。今、臼井委員がおっしゃったような、どういうふうな形でこれに反映させていくか検討の余地がある気がする。例えば、コロナ禍がどう続くか分からないが、途中での目標の方向修正などは考えるのか。（佐久間議長）

⇒来年度、構想策定から5年を経過する年になるので、市民アンケートをもう一度取り直して、例えば当初設定した成果指標は、中間時点でどのように推移しているか、そういったことを捉えていきたいと考えている。それと併せて、毎年行っている関連事業の実施状況調査、そういったものを踏まえて、構想の進捗状況を評価していきたい。（小柳係長）

・10年間というのは凄く長い期間のため、状況ががらっと変わってしまうので、その都度修正してバージョンアップしていった方がよい。（佐久間議長）

・この枠の施策体系の中で、札幌ならではの展開をしているみたいなものというものはあるのか。（原田委員）

⇒基本施策Ⅰの人づくりの二つ目の多様な学習機会の提供の中に入っている、施策の展開の8番、「ふるさと札幌に関する学びの充実」という項目において、豊かな自然や文化など、貴重な財産を持つ札幌市の環境を活用した学習、「札

幌らしさ」などを再発見できる学習機会の充実、そういったものを図って、市民のまちへの愛着を育むというようなことで取り入れているものはある。（小柳係長）

- ・これはあくまでも生涯学習に関する部分で、そのほかに札幌市ではいろいろな計画があって、その中では、そういったものもきちっとフォローされていると思うが、生涯学習のほうの計画でも構想というのは、方向性を示すだけ。具体的にこの事業をやるというところまでは、ここでは示されない。それは毎年、行政のほうで、ここで示された方向性にのっとなって、事業を展開していくのだと思う。（佐久間議長）

## (2) 今期の協議テーマ

「地域課題に対応する社会教育～災害に向き合う地域づくりを例に～」について

### ア 事務局説明

事務局から、資料2「第7回会議 参考資料」・資料3「報告書作成に向けた中間報告」及び参考資料「文部科学省中央教育審議会（平成30年12月21日付答申）」等を用いて説明を行った。（寺崎社会教育担当係長）

以下、説明要旨

- ・提言に向け、より協議の方向性を明確にしていきたいことから、本日よりテーマを仮に「地域課題に対応する社会教育の在り方について～災害を事例に～」と設定させていただきたい。
- ・資料全体の構成として、前回会議までに協議いただいていた「課題」について、前回の会議内容を踏まえ、改めて整理・分類し直し、そこから見えてきた「提言」につながるキーワードを提示。
- ・前回会議で盛んに協議されていた内容を今後の提言につながる重要な課題と位置づけ、アンダーラインを引いて示した。
- ・課題について、テーマにもある「社会教育の在り方」を問うものとして考え方を整理するべく、社会教育では欠かすことのできない3つの柱、「人づくり」、「つながりづくり」、「地域づくり」という視点で新たに分類し直して提示し、参考資料「文部科学省中央教育審議会（平成30年12月21日付答申）」を用いて説明。
- ・資料2の「3. 3つの柱から見えたキーワード」として、個人の学習や成長と

いう「人づくり」の視点から「自分ごととして捉える個の意識づくり」、「孤立を生み出さない学び」を提示、また、個人の学びを通じたつながりという、「つながりづくり」の視点から「大人と子どもが繋がる学び」、「多様な人材のネットワーク構築」を提示。さらに、学びを通じてつながった市民が、地域課題に共有して向き合うという「地域づくり」の視点から「身近な学習環境の充実」、「民間等の今ある資源の有効活用」をキーワードとして提示。

- ・資料3を用い、最終的な報告書の形がイメージできるよう素案を提示し説明。
- ・最新の社会教育の国の動向を示すものとして「第10期中央教育審議会生涯学習分科会における議論の整理」を参考配付。

#### イ 主な意見・質疑応答

- ・質疑応答はなし

#### <「地域課題に対応する社会教育の在り方について～災害を事例に～」について>

- ・本日から、まず協議テーマを、一旦仮に「地域課題に対応する社会教育の在り方について～災害を事例に～」ということで少々修正を加えている。それで、今後は、本テーマを踏まえて、提言の作成に向け具体的な協議を進めていければということ。社会教育における3つの柱ということで、これまでの委員の皆様からいただいた課題に対する御意見を、人づくり、つながりづくり、地域づくりという形で分類し、そこから見えてきた提言に最終的につながるようなキーワードが6つ示されている。このキーワードを基に、本日は課題や課題解決に向けての方策等の具体的なアイデア、キーワードそのものに対する御意見、修正を加えた協議テーマについても御意見をいただきたい。報告書の素案、イメージということで、資料3の「報告書作成に向けた中間報告」も提示されているので、こちらも議論の中に加えてほしい。

まず、人づくり、つながりづくり、地域づくりという3つの柱で整理をしたということ。平成30年12月に中教審の答申が出ているが、社会教育という名称が入ったものとしては、30年ぶり。なかなか社会教育を扱った答申はなかった。また、「第10期中央教育審議会生涯学習分科会における議論の整理」に記載されている内容は、今回この社会教育委員の会議で議論しているものと非常にリンクする部分があるので、事務局のほうで参考にとということで今回会議に出していただいた。

この「人づくり」「つながりづくり」「地域づくり」ということだが、社会教育では、まず最初から地域をつくろうということではなくて、まず一人一人が成長してもらわなければならない。一人一人がしっかり人間的な成長をして、それがつながって、地域のいろいろな課題とか問題に対する取組を進めることによって地域がつくられるという、こういう3段階。「人づくり」があって、「つながりづくり」、そして「地域づくり」3段階と。3段階だからといって、段階を追って進めなければならないということではなくて、これは3つとも同時並行的に進んでいくものではないかなと思っている。（佐久間委員）

- ・非常に素晴らしいまとめ。まず人づくり、つながりづくり、地域づくりについて、これらのキーワードが非常にぴったりきてよろしいのではないかなと思う。今回、災害ということだが、やはり自助・共助の部分があって、人づくりがやはり自助にもちょっとつながっていくかなと思っている。また、つながりづくり、地域づくりが共助の部分でもあり、一部、地域づくりのところは公助の部分もちょっと絡み合ってくる。そういう意味でも、今回のテーマが災害ですとか、そういったことの視点でやっているのだから、非常に素晴らしいキーワードになっていると思っている。（鈴木委員）
- ・では、3つの大きな柱で整理していくこととする。皆さんから出た意見を事務局の方で整理したキーワードについてはどうか。（佐久間議長）
- ・方向性はよい。これまで話をしてきたことがよくまとめられている。札幌市の独自性というのをずっと考えてきて、もうちょっとそれが見える内容になっていくといいのかなと思う。（原田委員）
- ・これから、柱とキーワードが決まって、そのために具体的にどんなことをやったらいいというときに、恐らく原田委員がおっしゃるような、札幌市としてはこういうようなことをやったらいいのではないかと、という独自性が出てくるのかなという気がする。ほかの自治体がやるのと違う、札幌ならではの取組。（佐久間議長）
- ・3つの柱、本当にそうだなと思う。キーワードはそれぞれ連動しているのでこれは別の柱ではないかというところも感じた。人づくりに関して、「自分ごととして捉える意識づくり」は本当にそうだなと思う。人づくりの中で、この中

央教育審議会の資料にある、社会教育士取得というところが出ており、やはり専門性のある人材がいるというのは、人づくりの中では大切なことなのかなというのをとても感じた。（一戸委員）

- ・社会教育士というのは、これまでは社会教育主事という任用資格で発令されて初めて活きるような資格だったが、今年度から社会教育士、民間の方にもそういう資格を取ってどんどん活躍していただくということで、その辺が変わった。そういった方が地域の中で増えるというのは一ついいのかなというような気がする。（佐久間委員）
- ・明確に柱を分けるのは難しい。自分が存在しているだけで様々な人のニーズに対応している「レンタルなんもしない人」のように、誰かが明確な役割を持つのではなく、そこに自分がいることによって人々が救われるみたいな、そういった人づくりがここに盛り込めないかと考えている。200万都市の札幌の都市機能の中で、ぎすぎすした部分を埋めるものが、何か人づくりの中であつたらいいのではないかと思った。（臼井委員）
- ・今回、この協議資料にまとめていただいて、非常によく、こんなに素晴らしいのだなと思って、また、仮のテーマも、非常にじっくりくる仮テーマであると思う。（土田委員）
- ・人が育ってからつながるのか、つながりから人が育つのか、どちらなのか考えている。つながりづくりで考えたときに、札幌市全体でお金をかけて事業をやり遂げている割には、知っている人と知らない人、参加した人と参加していない人、その差は結構大きい。もっと、本当に細かい地域単位、町内ではなくて、防災という視点で考えたときに、災害の種別ごとに地域をつくるのもありかなと思った。川がある地域に住んでいる人とか、地盤が弱い地域に住んでいる人とか、地域別によってもまた対策は違ってくるので、その地域で新しいつながりを立ち上げて、そこから人が育つような感じにすると、防災という意味ではやりやすいのかなと思った。

原田委員の言う札幌市の特徴をつかむ対策、そういうのを考えたときに、札幌は特に転勤族とかいろいろな人が多いので、結構人見知りしないというか、仲間に入りやすい。札幌は外国人に対してもすごく親切だと聞いたことがあって、そういうところをうまく生かして、札幌だからネットワークがつくりやす

いというか、人種とか性別を超えて仲よくなれるみたいなそういうのを、やってみたらいいのではないかなと思った。（山口委員）

- ・人づくりが先なのか、そして、つながりの中で人が育つ、それはすごく大切な視点ではないかなと思う。人づくり、つながり、地域づくりをきっちり線を書いて分けるのは難しい。札幌市を一つの社会教育として当てはめるのではなく、地域ごとにカスタマイズした社会教育も重要。災害において地域をどう解釈すべきか。SNSの活用も含め広域的な地域の考え方、総務省の言う出身者や知り合いなどの関係人口、そういったところまで入れた地域という考え方にすると、何か災害に結構強いのかなと個人的には思った。（佐久間委員）
- ・3つの柱は大変素晴らしい。ただ、柱は基本的な部分でしかなく、この会議で出ただけのものなので、現実には必ず見落としている部分はあると思う。キーワードを見ていくと、人がつながって何かをつくっていくとなると人の気持ちというのがすごく大切になってきて、共感、共鳴するグループをいかにたくさんつくるかが大切。そのきっかけをつくるために、いかに情報を提供してそのテーマに取り組もうという気持ちを育てていくかということに目を向けていかなければならない。SNS等の活用も考えていくべきである。（安田委員）
- ・そういった取組をしていくためのキーマンが必要ではないか。（佐久間委員）
- ・いろいろなものを提供していく中でキーマンが出てくるのでは。最初からキーマンになる人はいないのでは。（安田委員）
- ・札幌は大都市なので匿名性と地域コミュニティの相性が悪いと感じているが、それを逆手に取ったことがきっとできるのだろうなと思った。匿名性が高いほうが飛び込んでいける場合というのがあり、私も地域の濃いつながりにはなかなか入っていけないけれども、例えば「レンタルなんもしない人」みたいに、誰でもいいから声をかけてくださいみたいなので声をかけられて、じゃあ、行きましょうかというのは多分できる。そういったところで、札幌の規模というのは、それが可能なのではないか。適度な距離を保ちつつのつながり、行政からは見えていないところにいる、まさしく盲点なのだが、盲点にいる人たちが自発的につくるつながりというのは多分ある。「レンタルなんもしない人」の例のように匿名性の高い都市でも人はつながりを必要とする場面があると思う。そのインフラをつくるのが行政の仕事なのでは。お金のかけどころとし

では、社会教育施設のICT環境の整備を強く出していった方がよい。公助としてそこに予算をかけて整備してほしいと思った。（原田委員）

- ・新しい形のつながりを考えていかなければならない。札幌市の社会教育行政として何を使えるか、何を持っているかを整理しておく。ちえりあ、地区センター、まちづくりセンター等そこにICT環境を整備する。そのICT環境の整備とか、それに対する予算の充当とかというのは非常に重要なことかなというような気がする。（佐久間委員）
- ・まず、この3つの柱は、非常によくまとまっていて、いいキーワードだなと思っているが、柱、キーワードは、段階でもなく、はっきり区分できるものではない。人づくりがあって、それを囲むようにつながりづくりがあって、それを囲むように地域づくりがあって、それで広がりが出てくるというようなイメージで捉えるといいのかなと思った。また、「場づくり」「機会づくり」「きっかけづくり」と書かれているが、きっかけとか場をあえて創るのではなく、社会教育行政や市が、自らが育っていくようなきっかけを少しつくってあげる、ちょっと背中を押してあげること。場、機会づくりに加え、「促す」とか「背中を押す」ようなことを少し広げていくことが今後重要になっていくと思う。リーダーが自然に見つかっていくことを行政として注目していくことが重要。（鈴木委員）
- ・「人づくり」ということでは、「自分ごととして捉える個の意識づくり」と書かれているが、地域の一員としての自覚を持たせることは非常に難しい。地域の中で自分は役に立っているんだという感覚をどうやって持ってもらうか考えたときにボランティア学習、これを学習機会として勧めることも一つと思う。いろいろなボランティアを通してサービスの享受者から提供者になるということ育てられるのかなと思う。また、「つながりづくり」の「大人と子どものつながり」では、サタデースクールをやっているので、これをプラットフォームとして生かすことがよいのではと思っている。その際、現在は大人が子どものためにやっているが、子どもを先生にして大人が子どもから学ぶスタイルの新しい試みをしたらどうかと思う。SNSやICTは子どもの方が精通しており、子どもとの関係、子どもの意欲を高めることにつながるという気がしている。「地域づくり」の「身近な学習環境の充実」では、地域の災害時の避難場



所を地域の学習拠点として指定し、そこで日常的な学習機会を提供する。そうすると災害時にも集まりやすいのではないか。（佐久間委員）

- ・中教審のほうでも7ページでボランティアの重要性というのが語られているが、各学校の方から聞くのは、やっぱりボランティアのなり手がいないということ。恐らくだが、本当に私たちぐらいの世代の氷河期世代以下は、もうボランティアをする余裕がない。その余裕がないところで、どのようにボランティアに参加してもらうかというのはなかなか、ちょっと私も答えが全く出ない。ただ、それをもってICT環境の整備の根拠とするのは可能かなとは思う。手元の端末からもボランティアのようなことは多分できる。ICT環境の推進が余裕の無さの観点からも重要だと思う。（原田委員）
- ・これまでのボランティアではなくて違う形で、例えばメールで相談に乗るとか、何かそういった違った形のボランティア。そうすると現役世代でばりばり働いている仕事が忙しい方でも、ちょっとメールの1通や2通ぐらいだったらというようなサポートはできるかもしれない。（佐久間委員）
- ・何かやりたいと思っている人をどうすればよいかと思っていた。札幌の人は優しく、こだわりがないが、反面人づきあいが希薄。先ほどの「レンタルなんもしない人」のように、責任を負わなくてもいいんだよという、とにかくフラットに人と付き合える感覚が身に付けばいいのかなと思う。しかし、本当に責任がないと大変なことになるので、キーパーソンというか、やりたい人をピックアップして、責任を負っていないように思うような環境づくりが大切ではないか。自由保育をすごく思い出して、子どもたちはすごく自由に選んで好きな遊びをしているように見せかけて、すごく環境はつくり込まれている。子どもたちがその中で好き勝手にやっているようで、でもすごく育っていくというような考え方があって、それを思い出した。みんなが地域にフラットなかたちで参加できるような、札幌の人たちの市民性とか人柄とかを生かしながら環境づくりというところから人を育てていく、当事者になっていくというようなシステムづくりが大切。（一戸委員）
- ・ボランティアが肩を張らずに、いるだけでもボランティアなんだということ、子どもたちや親とかにも学んでいただく地域があるというのが重要。避難所を学習拠点として位置付けることは素晴らしい。小学校が避難所になってい

るので、それが結局サタデースクールにもつながる。サタデースクールにしる、学習拠点になっていくと普段からそこに行って学ぶという環境になるわけなので、避難所の構造とかいろいろなところも、ここにトイレがあつてとか、そういうのも分かってくる。それが、私が以前お話ししていた地域を知るとか、避難所を知るということにもつながるので、非常にすばらしいキーワードというか、位置づけになると思った。（鈴木委員）

- ・ボランティアをコーディネートする人が必要ではないか。その人が、こういう人と、こういう人をマッチングしたりとか。（佐久間委員）
- ・ICT分野ではコーディネートが進んでいる。ベビーカーの階段移動のお手伝いなどは、スマホのアプリでもコーディネートできるものがある。技術で改善できないだろうか。（原田委員）
- ・単に募集だと自分から行くのはちょっと役に立たないかもしれないし、でも頼まれたら行くというところはあるのかなど。ちゃんと明確な役割があつて、これを、となったら、意外とみんなやってくれる。その中でどんどん当事者になる、そういったシステム。ボランティアの集め方について、少し視点を変えるというのはいいのかもしれない。（一戸委員）
- ・PTAもボランティアに近い。私たちの活動に、働くお母さんが多いということは、全くそのとおりで、私たちの活動というか、活動することが厳しいというお母さんは岐路に立って、いろいろなことを今改革したり変えていく。社会の今あるものの中でボランティアとして活動していけるような在り方も考えていかなければならないと思う。あと、避難所を学習の場にするのはとてもよい。普段からそこに行くこともやっぱり必要（土田委員）
- ・お父さんが議論から抜けている。そこを変えていかないと本当の地域はつくれないのでは。（臼井委員）
- ・もちろん区別なく活躍していただきたいのが理想。どうしてもPTAの歴史の中では、主にお母さんの力を借りていたが、お父さんも一緒にやりましょうと声をかけてきた。そのため地域の会社を回ってPTA活動への協力をお願いしている。それぐらいそういう活動に参加しやすい社会を目指して活動をできればということ。（土田委員）
- ・お父さん方が社会参加をしたり、あるいは子どもに関わっておくことをすると

結果的に実はビジネスに非常に役立つ。企業の論理でいろいろな仕事が進められているが、そこに何か非常に欠けたものがある、それが商品であったりサービスであったり、どこか今一つパーフェクトにならないのは、やっぱり社会であったり家庭であったり、様々なそういう視点が抜けているというのが全体に感じる。会社で、ボランティア休暇を取ったりPTA活動することを優遇するのは、実はビジネスにも役立つのだということは結構大事な視点だと思う。（臼井委員）

- ・ 3点ある。1点目はこれまでの話を聞いていて社会教育休暇がほしいと思ったということ。防災講座に行くために休めるなどあったらいいなと思う。2点目は、お父さんの社会参加は本当に欲しいが、男の人は社会の規範を押し付けられて余裕なく働かされている現状なので、余裕を持たせてほしい。社会教育から離れたことだが、その根本を変えないことには社会全員参加は望めない。男性も女性も余裕のある働き方に変える、変えてほしいという提言はできるのか。3点目は、人は助けを求められれば、多分みんな助けるのだろうと凄く思う。助けが必要な人が助けを求めるスキルというのは防災の観点からも重要ではないか。現実には、うまくヘルプが出せない状態の方が多い。それは先ほどの余裕の無さもあるのだと思うが、助けを求めるスキルを皆さんにつけていただければというのをどこかに盛り込めればと思う。（原田委員）
- ・ 社会教育休暇などの社会の根本的なことを変えなければならないものは、社会教育行政でもやれることと、やれないことがある。社会教育行政で、できることは、企業などに協力を求めることではないかと思う。報告書のなかでは、企業にこういったことの協力を求める程度の書き方はできるように思う。だけれども、それを実際にやれるかは非常に難しい。だから、地域の一人一人に期待すること、企業に期待すること、それから、どこどこに期待すること、そういうような形で期待することは書く。そして、行政としてやるべきことはこういうことをやるというような整理になるかもしれない。（佐久間委員）
- ・ 今のNPOはボランティアが主体。ボランティアを受け入れる側が少し思うのは、ボランティアの質が悪いということ。ボランティアを推進するのであればボランティアの育成というのが凄く大切。ボランティアが自分自身の自己実現を求めてくるので、団体の趣旨と離れ、ごちゃごちゃになる場合がある。社会

福祉協議会がボランティアと関わっているので、社会教育と社会福祉が連携して進めていくことも大切だと思う。あと、サタデースクールで子どもたちから話をとということがすごくいい。YouTubeを活用した活動などは子どもの方が使いこなせる。その活動を親に伝えることもまさしくボランティア。それが親たちに告げられて、親たちもその意識が高まっていく。子どもたちから大人たちへの学びを、ということを通して社会を変えることにつながっていくのかなと考えている。（安田委員）

- ・「子どもを先生に」というのはとても素晴らしい。やっぱり大人が先生、子どもたちが学ぶというよりは、一緒に学んでいくようなプログラム。あえて先生をつくらずに、一緒になって一緒に探求していく、そういったサタデースクールがあるとよい。あと、資料の部分だが「リーダーを新たに育てるのではなく～」とあるが、育てるのではなくと断言しているが、育てるのも重要なので「育てるだけではなく」とか「育てるのみではなく～」でよいのでは。（鈴木委員）
- ・ボランティアのマッチングについては、ボランティアの育成がとても大変というところも含めて、やはり防犯意識を持つ必要があるのではないかと。マッチングについては悪い人もいますので、すごく細心の注意が必要になってくるのだなと思った。マッチングアプリは防犯上の課題もあるのでそれを防ぐ土台作りから始めるのが良いのでは。避難所を学習拠点というのは、まさに本当に公的な場所なので、すごく理にかなっているが、子どもたちが通うところにいるいろいろな人が出入りするということは、多分、学校側があまりいい顔をしないのではないかなと思った。田舎の地方でそういうことをされている地域もあったが、札幌だと不特定多数の人が地域の人かどうか分からない状態の中で、無差別にどうぞというのもちょっと怖い。その辺で、地域の人だと明らかに分かる何か仕組みをつくるのが重要なのかなと思った。（山口委員）
- ・すごく大切な視点。どうやってそれをクリアしていくかというのはなかなか難しい。最後に、テーマについてはどうか。（佐久間委員）
- ・「災害を事例に」とあるが「事」はあるのだろうか。「災害を例に」ではダメなのか。事例とすると、事例1、事例2のように、必ずケースを出さなければならぬので。（臼井委員）

- ・臼井委員の意見を踏まえ修正いただき、また次回意見をいただきたい。（佐久間委員）

(3) 連絡事項

次回の会議は12月15日(火)9:30～予定。(10:00～を変更)